「イエスが生きている」　使徒言行録２５章１３～２７節

細井　茂徳

今日の聖書箇所には、ローマ総督フェストゥスとユダヤの王アグリッパとのやりとりだけが記されており、あまり面白くない箇所と思われるかもしれません。パウロ本人も登場してきません。内容も、これまでに記されてきたことの繰り返しのようにも思えます。でも著者のルカは、なぜかこの話を事細かに記しました。なぜでしょう。どうしてルカはこのような話をわざわざ記したのでしょうか。

おそらくそれは、１９節に表されていることを伝えたかったからなんだと思います。つまり「**死んでしまったイエス**」を、囚人パウロが「**このイエスが生きている**」と証ししていたこと、そのことを伝えたかったからなのでしょう。なぜなら、これこそが福音の中心的なメッセージだからです。単なるメッセージというだけでなく、それを信じて生きている（私たち）キリスト者にとって“喜ばしい希望”であり、またその人の人生を根本的に“変革する力”にもなるからです。

そもそも、この書の著者ルカもこのことを中心的なメッセージと見ていたのです。「十字架につけられたあのイエスは、よみがえって今ここにおられる。共にいて働いておられる」というのが、ペトロをはじめとする使徒たちのメッセージの中心だったのです（使徒言行録２章，３章等参照）。これはまたパウロも主張していたことであり、現代の私たちが伝えるべきメッセージの中心でもあるのです。

ペトロや使徒たち、またパウロ自身も、【主イエスが生きておられることの証人】でした。翻って、私たちはどうでしょうか？　よみがえって今もここにおられるキリストと人格的な交わりを持っていますでしょうか。そして証ししていますでしょうか。キリスト教信仰の根幹は、まさにこの主イエスの復活体験にかかっています。